

昭和
和
二十四
年
七月
二十三日
發行
（種
種郵
便物
認可
）
（每
月一
回・
十五
日發
行）

（通
第二
三九
號）

慈光

第二十一卷

第四号

次

真心徹到と自然の建現……………近角常観……………(1)

人生と信仰……………福島政雄……………(3)

（御本書をいただいて）

一道会の記(三)……………榊原徳草……………(7)

病間日録……………大野静哲……………(12)

目
大字佐平治さまの追憶……………園憲章……………(14)

大字さんに聞く法味二つ……………聚墨生……………(17)

歎異鈔第六章……………花田正夫……………(19)

真心徹到と自然の建現

近 角 常 観

山に入る者はまた山を出で、水底を窮むる者は能く水上に浮ぶ。もしそれ絶対究竟の大信海に徹底し去らむか、必ず自然に相対人生の広海に游泳して、至徳の風静かに、衆禍の波転ずるの妙趣を展開しきたるものである。これ真宗教の極致は、真人生を実現する所以である。親鸞聖人が真宗をはじめらるるや、往還二種の廻向をもってその根本義とし、入出二門の功德をもって他力の極致とせられたは、実にこの宗教の真髓を窮め尽くされた焦点である。

徹底なる標語は、現代人の思想及び生活において、もっともねらわれたる射的である。しかも徹底せんとあせりつつ徹底し得ざるが理想家の血涙をそそぐ点である。親鸞聖人の金剛の真信たるや、自力修養によって徹底せるにあらずして、如来の真心が、罪惡の我等が胸底に徹到し来りて、心髓に透入することである。ここに衷心の慚愧懺悔を生ずる次第である。聖人が、誠に知りぬ、悲哉愚劣鸞、愛

欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまず、愧ずべし傷むべしと、悲歎述懐せられたるは、我等が人生生活の闇黒を照らしたまう灯明台である。云々。

『能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を断せずして涅槃を得るなり』と、これ聖人の真宗の真面目である。理想家が徹底の峻嶺を越ゆるあたわざるは、煩惱無尽誓って断たんことを願う、の自力修養をもつて、菩提の崖魁（がい）（がい）をのぼらんとするからである。しかし、ややもすれば現代人が煩惱即菩提の口実をもつて、自然放縱の生活を塗糊し、産業即実相の主張の下に、我執貪欲の爪牙をたくましくせんとするが如きは、忍ぶべからざる悲惨である。煩惱無尽の我等、唯、尽十方無碍光の慈悲に融化せられて、はじめて煩惱の水解けて功德の水となり、ここに心光照護

の真人生を実現し来るのである。

聖人の信仰は、現生の一念に如来の慈光に接触することである。しかしてその最高の理想たる真実の証は、穢土の現身にあらずして、彼岸の涅槃常樂の真身に入るときである。故に現在の人生は飽くまで煩惱の稠林（ちゆうりん）である、生死の園林である、しかも彼岸の光明は、この園林に反射しきたりて、人生を莊嚴する崇高なる理想をもたらし、森嚴なる意義を実現すること、あだかも楊柳枝頭の露、滴々天上の月を宿すが如く、卑湿淤泥のうち、清淨の妙蓮華を生ずるが如くである。かくして健全なる国家、平和なる社会、清潔なる家庭を建立し得べきである。しかれども、これ如来の建立したまえる浄土の返照にして真心徹到の金剛信よりきたる、自然法爾（じねんほうに）の余徳たることを忘れてはならぬ。しかしすでに煩惱の稠林である、生死の園林である、叢棘（そうりん）の稠林である、暴風驟雨（ぼうふうしゅう）もある、愛憎違順して高峯岳山（こうぶがくざん）もある。

しかしてこの間に処して「たとえは日光の雲霧に覆わるれども、雲霧の下明らかにして闇無きが如し」といえる信後生活の光景を実現し来るにいたりては、妙趣言語に絶し至高道理を超え、ただ仏智不思議と讃仰するのほかなし。さてその理想といい、修養という皆信後に属するもの、

これをもつて信前の空想、自力の修養と誤解して、求道のつまづきとなさざらんこと、筆者の杞憂（きゆう）（きゆう）にたえざるところである。

こいねがわくば求道の士、まず真心徹到ののちに、逍遙として自然に人生園林の莊嚴を体得せられんこと、至願にたえざるなり。

大正七年、六月十六日、夏季求道会『正信偈』講讀後稿了す。

（註）本稿は『慈光録』の序文であります、目下絶版になつておりますので、その要文を頂きました。（編者）

近 角 先 生 語 録

法を主として、人を主とせぬなどいうは大いなるあやまりである。全体浄土教というが、人を主とした教である。

如来の人格を認むるところに生命がある、しかし人格といえはとて、決して化仏ではない、観想の形相ではない、如来招喚の親心である。釈尊も弥陀同体として「我阿闍世のために涅槃に入らず」と遺訓したまひし如来常住の人格がありがたいのである。

信心を得ることが、釈迦、弥陀二尊の御もよおしであるというが、聖人が仰ぎたまひし如来である、さればこそ、師主知識の人格があがめるようになったのである。

（信界建現、十号）

人生と信仰

(御本書をいただいて)

福島政雄

親鸞聖人の御本書というのは教行信証のことであると承
つて居ります。此の御本書はむつかしく拝読すればどこま
でもむつかしいが、信の一念をもって拝読すればよくわか
るものであると近角常観先生が仰言ったことがあります。
私が御本書をはじめていただいたのは二十六歳の夏、先生
から信の巻の阿闍世王入信文について非常に熱のある御講
義を聴きました時からであります。その時次のお言葉に深
く感じました。

悲しい哉愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に
迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近
づくことを快(たのし)まず、恥づべし傷むべし矣。

此のお言葉に対して私は最初にどんな感じを持っていた
か、私の性格にはセンチメンタルなところがありますので
或はそんな感じで此のお言葉を受けていたかも知れませ
併し聖人はセンチメンタルな心持を少しも持たれなかつた
人であります。このお言葉も御自身の現実の御告白であり

ます。その事が私には次第にわかって来ました。
その後私は三十一二歳の時に最初に、生れて二年八ヶ月
の長女を亡くし、それから二十五歳の妹と五十五歳の母と
を一週間置きに亡くしましたので、悲痛のどん底に落ち、
世の中が真暗になって過しました。その時の私は逢う人毎
に悲痛な心持を振りまわし、誰かに同意を求めようとしま
した。併し私の心持を理解して同情する人は無かつた
のであります。

此の世は一人一人孤立寂寥(せきりょう)の世界であり
ます。人間はそれぞれ境遇や事情がちがうので、決して同
じ心持は得られない。親を亡くし子の死に遇っても、本
当に同情し理解してくれる人は無いのであります。一応同情
するといふことはあつても、本當にわかつてくれる人とい
うものは無いのであります。それで此の世の中に対して僻
(ひが)む心も起つて来るのであります。

此の心は何処に解決を求めますか。自分の煩

悩生活をもって悲しみをごまかすという道もあります。そ
れは迷いの道でありますけれども、私もそのような方に陥
つたこともあります。併し煩惱をもって煩惱をごまかさう
としても結局駄目であります。私は三十七歳で西洋に行き
西洋二方年の間に煩惱をもって煩惱をごまかすというよう
なことを少しは致しましたけれども、結局は駄目で西洋か
ら帰つて来ました時にどんな感じを持ちましたかといえ
ば、此の世にもはや生みの父母が居ないという淋しさを痛
切に感じましたのであります。そして自分というものをし
みじみと振りかえりましたのであります。

自分の如実の姿はどんなであるか。聖人は涅槃経から引
用なされて、世の中には心の病の治し難いものが三人ある
と仰せられています。それは、謗大乘、五逆罪、一闍提(一
いぢせんたい)という三種の人間であると言われます。

謗大乘とは正しい道を謗る、正しい道に徹底している人
を謗るもの。五逆罪というのは父母を殺す、阿羅漢という
悟りを開いた人を殺す、和合してまことの道を求めている
人々の和合を破る、仏身に傷をつけて血を出すもの、など
である。三に一闍提(いぢせんたい)というのは善根を断
じ、信が具わらないものであります。

此の一闍提というのが問題であります。此のあとに阿闍
世王のことが物語られてあります。阿闍世といふはどんな

人かといえは、今の三つの中で五逆罪を犯した人である。
ここで私どもが考えねばならぬことは、五逆罪を犯すほど
の人は善に転ずることも鮮かであります。悪にも強ければ
善にも強い。阿闍世王は父を獄死させ、母を深宮に押込め
たほどの逆悪の事を行つたが、善に転ずる時は非常に鮮
かに転じているのであります。

その次の一闍提というのが涅槃経にも色々説明してあり
ますが、これは一口に言えは何としても手のつけようのな
い人である。例えば屍(しかばね)のようなものである。
どんな名医でも屍は治すことは出来ない。一闍提とは、
つまり、求道心の少しもない、全く無自覚の、何とも手の
つけようのない、例えば屍のようなものである。この世の
中に色々の菩薩があつて、その菩薩は色々の心の病をなお
すが、此の一闍提ばかりはなおすことが出来ない。もろも
ろの人には仏性があるというけれども、此の一闍提には仏
性が微塵もない。全く手のつけようのない屍であり、求道
心は微塵もない、根本的な無自覚であつて、どんな菩薩で
も如何ともなし得ない代物(しろもの)である。この一闍
提こそ何よりも一番問題となるのであります。

これは他人の問題でなく私の問題であります。この阿闍
世王の物語を見ましても、私は、王はなるほど五逆罪は犯
したが、廻心が非常に鮮かであつた。併し私自身はどうで

あるか。自分はこの三つの中のどれであるか。そう言われたくはないし、思いたくはないが、結局自分は一闡提であるという事に落着くのであります。そう言いながら私にはまさか屍ではないという心が動きます。一闡提ではないという心が動く、一闡提の自覚というのはわからないのであります。

たとえば、いよ／＼死ぬる病人は自分は死ぬるとは思っていません。よくなる病人の方がかえって死ぬるのではないかと思います。死ぬる人はよくなることばかり思って死の自覚がない。人間というものはこんなものであります。自分の如実の相がわからないのであります。自分は悪いには悪いが、さすがにあれほどではないというのが私の根性である。併しあれほどではないと思っはいるが、実は急所に当っている。急所に当っているのに逃げようとあせる。私どもは五逆罪ではあるかも知れないが、一闡提ではあるまいと。丁度病人が明日はよくなるだろうと思いつつ死んで行くように、自分は一闡提ではないと思いつつ結局する／＼と一闡提に墮ちて行くのであります。自分のすがたがわからないのであります。結局私は一生涯をどうして行くかというに、無自覚のままに過ごして行くということになります。若し自分は無自覚でないと思っはいるならば、自分をごまかしているのであって、或る一時の殊勝らしい自分

念仏の世界に触れるのであると申して、そう思うて居りますが、それは本当のお念仏ではなく、お念仏という名を借りて自分の毒酒を製造しているのであります。三十台の私は正にその通りであつたと思っはいます。

自分の人生における如実の歩みはこんな所に慰安があるのではない。何等の修飾のない、何等の幻をも描かない人生の歩みというものは、その無自覚な一歩々々を歩んでいる、その歩みのうちに、何かに打突かっはつと目がさめる気がする。また無自覚に眠る。またはつと気がつく。又こん／＼と眠って行く。つまり自分のすがたに目が醒めず眠りから眠りに移って行くというのが、かけねのない自分の歩みであり、自分のすがたであります。

そこを我が聖人は明快に言われてある。親鸞は斯様々々の自覚に入って意義ある生活をしてるとは仰せられてない。どこどこまでも自分は無意義の生活を續けている。実に恥ずべきである、と仰せられ、そして三種の難治の機をあげて居られるのであります。

人間が自分の姿に目がさめる、自分の価値を自覚するということは非常に重大なことであります。私は自分がカメレオンのようなものであると思うのであります。その居る場所に從つて色々に変るのであります。私自身が修養とか兄弟とか家庭とか色々問題にしていますが、自分は修養

分の気持をとらえているのに過ぎないのであります。

「悲しい哉、愚禿鸞」というお言葉に感じ始めましたが、今から五十余年前でありましたが、その時は清々しい気持になつて法悦状態とはこんなことであるかと思ひました。夏のことで、今の明治神宮の裏手の方では鯛（ひぐらし）がしきりに鳴いていました。その声をきいて迦陵頻伽（がりょうびんが）の声を連想したり、如何にも自分は一かどの信仰に入つたと思つていました。併しそれは一時の気分酔うていたに過ぎなかつたのであります。そのあとで次々に起つて来る現実の問題に對して苦しむ時は、自分はその時あんなに廻心したつもりであつたが、實際問題になぜこんなに悩まされるだろうと思ひました。悩んでも苦しんでもあの信仰の心持からすぐに解決が出来ると思つていました。過去の法悦状態を偶像化していたのであります。

結局、私は苦しみと遇えば苦しみ、悲しみに遇えば悲しむ。大丈夫の心のつもりでいても、何かの問題ですぐにぐら／＼する。こんな頼りない根性が私である。このような心の引続き、その無常のすがたこそ私の自性であります。磐石のように動かない堅い心は私の中には微塵もありません。私は息を取るまで無自覚から無自覚を辿り行くものであります。そして時々人間煩惱の毒酒に酔うのであります。そんな時にはいよ／＼苦しみの底に至つてはじめてお

ということに破れてはじめて絶待の信仰に目ざめさせられたのであります。けれども絶待他方の信仰も近角先生のお話を聴けば、これも限らない底のあるもので、落ちて行つて、もつと堀ればそこに泉が出る。腰を落ちつける。いやこれはまだ底ではない。又堀る。堀ればそこに清い泉が出て来る。破れて又行く。一つ行けば又一つ。此のようにして無限に行くのが信仰の問題であると近角先生は仰せられました。

併し只一つ、どこ／＼までも頼りない無自覚の歩み、ふら／＼と限りもない歩みを續ける根柢のない私のいのちの上に、一つになつて共に歩みを運ばれ、私の無自覚の途上私のいのちの中心に飛び込んで、どこ／＼までも私に涙をそそぎ、私と共にはたらい下さる生きた力、實際の人生問題にぶつかるごとに、この大いなるまことのいのちの力というものを感ぜしめられる。忘れ続ける私に、私を目醒めさせようとし、私が苦しめば私と共に苦しめ給ひ、迷えば私と共に迷ひ、常に私に入り来つて私のいのちと共に動き給う力、私の上にさまざまの御縁を通じて生きた力としてはたらく、私をどこ／＼までも生かして下さる。此の大いなる私の力が私のいのちに入り満ちて下さることを感じますのであります。（昭和四十四年、三月十四日）

一道会の記 (二)

榊原徳草

ここで暫く休憩することにしました。餘り緊張の時間が続き、張りつめた念仏の光炎にもう堪えがたい疲れを感じたのは私のみではなかったと思います。いつも一道会で経験することの尊い疲れ、息もつけない法味の輝き、ここにも凡夫の自性、愚鈍の身がつく／＼思われることでもあります。憩いのひと時の後、向島諦宣先生のお話です。そのあらましを記させていただきます。

今日は遅刻いたしましたして申訳ありません。実は十二時前に家を出たのですが、高島屋へ寄ってお供えを買おうとして、家へ財布を忘れてきたのに気付いて、急いで家に帰ってやっと来ましたようなことでもあります。遅くなりましても、年に一度の一道会には是非参らねばと思ってやってきました。

それにしても財布を忘れるとは、大分呆けてきたようで大失敗をしまして甚だどうも赤面のいたりです。さて財布を忘れて失敗するのはまだよいが、お念仏が身を離れるようであっては困るので、いよいよの時に、娑婆へもどって忘れたお念仏を持って行くわけにはいきません。蓮如上人は「南無阿弥陀仏の主(ぬし)になるなり」と仰言るが、私は「南無阿弥陀仏が私の主になる」南無阿弥陀仏が私の主になっていただく、私はこの頃そう味うのであります。私とお念仏とは、切っても切れんお念仏になって下さる私の主になって下さると感じる次第であります。

池山先生には永い間お導きにあずかりまして、思出も数々ありますが、先生の追悼号の「呼子鳥」にも書きましたことですが、くりかえししましょう。先生の所に入入りしているよいお嬢さんが居られました、その方を私の弟の嫁に欲しいと思ひまして、先生に申し上げました所、もうすで

に婚約がきまっているとのことでありました。

それで、その日は帰りましたが、私が帰りますとき、先生はわざわざ松林の中から等持院の私の寓居の方へ出る近道を教えて下さって、そこまで送って来て下さったのです。私は先生にご挨拶して暫くその道を歩きまして、フト振り返って見ると、まだ先生は立っておられてジッとこちらを見送って下さっているのです。この先生のお姿がジッと私を見護っていられるお姿が、今でも眼底に残っているのです。親という字は、立木によって見る、と書きますが、先生は自分の親爺だという感じですが、「如来は一切衆生のために常に慈父母となりたまう」と涅槃経にあります。先生は親爺に会っている感じがいたします。

私は父には十九歳で別れました。丁度第三高等学校二年生の時、二月十五日に父は亡くなりました。今年父の五十回忌を夏休暇におくらせて営んだのでありますが、若い血気盛りには何とも思いませんことに親不孝者であります。年をとると親のことを親しく感ぜられ、しきりに思い出すのです。

平凡な田舎の人間であった父親ですが、非常にお念仏を喜んでおりました。

私が中学三年の頃に、誰でも出遭う若者の精神の動揺期に、人生問題などで悩んでおりましたが、そんなときに父

は「人生は不安なものだよ」と言ってくれたことを今でも思い出します。父はいつも念仏を申しておりました、今その念仏が私に生きています。そこには、横田先生、花田先生、池山先生、遠山諦観師、叔父の羽溪了諦、色々の先生方の感化によって、我慢の強い私が念仏さして貰っているその大本は父親の血と共に伝えられてきた、父の念仏をしみじみ感ずるのであります。それを開発すために色々の先生方の感化をこうむってまいりました。

こうした身を省みますとき、子供等のためには、何よりも自分自身が念仏を喜ばねばならんと、年齢とともに深く感じるようになりました。

次に、山口から来られた松村繁雄さんの話を伺いました。氏と私とは、お孫娘さんの看護学校の入学のことで御縁を結び、何時も法信を頂いておりますが、お目にかかりますのは今回が初めてであります。

七十になられて、どうぞしてお念仏をその孫娘さんに伝えたいとの法信をよく頂いておりますが、今日は、その求道の一端をきかせて貰いました。

私は二十四歳の時、四歳の長女がたった六時間の病気で亡くなりました。気違のように心が転倒し、葬式となって

も、お挨拶もせず床にもぐりこんで泣いていました。というのも、前年、その娘が中耳炎にかかった時、麻酔もかけずに私が押えつけて手術をうけました、たった三歳の子ながら、どんなに痛かったことかと、家内と泣いたことあります。もう一つはこの娘の二歳の時に次の息子が生まれましたが、この子は家内の産褥の身から離れようとしませんでした。私が抱こうとしても妻の方へどうしても行き、短気な私は二歳の娘を戸外へ出したので、娘は死ぬほどの泣声を張りあげて叫びました。

こんなことのある娘とて、短時間に亡くなった娘が可哀想で葬式にも出られぬ始末でした。式のすんだ晩、実母が私の煩悶の姿を見て、私の部屋で寝てくれましたが、障子をあけて枕元へ坐ったり、また出たりして遂に母は声をあげて泣きます。私が泣くのをやめてくれ、と申しますと、母は更に泣いて

「繁雄や、これがあきらめられようか。私は孫娘の死を悲しむのではない、あきらめきれぬお前が可哀想でならぬ。お前の心はようわかっておる！」

と、泣いて云ってくれました。その母の心は、その時には私に通じなかったのですが、その後いろいろおそだてをいただきまして、遂にお念仏申す身とさせて頂きました。

今、七十歳を越して、生活力を無くした父を持つ孫娘が

ものですから、芦屋の仏教会館に小さい時から祖母や、母に連れられて、よく参る習慣になっていました。

ある時、芦屋会館での池山先生のお話があったときでした。何時ものように、こつそりと私は後の席でお聴きしておりました。寒い時で集る人々もすくなく、お話が終りになりましたとき、先生は壇からおりられて、ツカツカと私の方へ来られて「その人、その人」と呼び出されたことがあります。こつそり、聴集の背後にかくれている私が、それ以来打ち破られて、自分の内に直接聴かせて頂く態度に、先生によって、先生からして頂いた思い出があります。

それから先生のお宅へおうかがい申すようになり、その頃はまだ私も若かったので、友子奥さんや、愛子お嬢さんと打ち興じてお話ししたりしていますと、先生はそれに合わせて何時までも時間を過ぎさせて下さいました。

今、私は学校につとめておりまして、学生に接してありますが、仲々学生の中へ這入れないのでございます。先生は信仰のみでなく、常に飛び込んで下さるお方でありました。私などは技術で学生の中に這入ろうとしますが、先生の態度はそうでなかった。そんなことが思い出されます。毎日の生活のことにかまけておられますとき、一道会の通知が来ますと、それが「桧舞台に呼びあげられて」につなが

成人しますにつれて、この孫娘にどうぞしてお念仏をど日夜思うことでありますが、我身を省みますと懈怠の日ばかり重ねてお恥ずかしい限りであります。母のお慈悲の一端を申しあげました次第であります。

次に、福本慶子さんの述懐を記させて頂きます。

私は、常々雑用にばかり取り紛れており、御法の有難きなど遠ざかってばかりでおります。池山先生の年に一回のご法事のお知らせを受けますと、ああもう一年が来たとの感を深くいたします。

平素は歎異鈔も読みませず、仏様の御給事もおこたがりであり、御仏縁が待っている唯一の日がこの一道会であります。いつか『慈光』にも書かせていたことですが、年に一回のこの一道会は、私にとりましては信仰のおざりから、年に一回、池山先生の感銘の深いご講話の、「桧舞台に呼びあげられて」での「唯円房の蔭にかくれている私」への「かくの如きのわれらがためなんですよ」、あのお慈悲の呼び声が、この一道会、そんな感じがいたします。

若い奈良の学生時代に、先生が時々、上三条の浄教寺で御講話下さったのですが、私は兵庫県の御影に住んでいたつてきまして、ありがたいことだと思えます。

先程、浄住寺さんが、池山先生の「しみこみ」を読まれました。言葉の信仰から、行へのしみとおしていく先生のお話、ありがたく聴かせて頂きました。若い時にお念仏を聞かせて頂いて、或時は踊躍したりいたしますし、お聞きしたことで納得がいくまで質問しました。そうした質問の中で、信仰と道徳とがどうも引掛ってしまいました。中年になってそのままにしておりますが、その頃は花田先生によく聞かせて頂いておりました。しかし若い時には律法的、理論的で、矢張り信仰の上からはよい行いが出来るはずというように思い、それで一応は納得しておりました。しかし、今では、道徳が宗教の上からよく出来なければならぬのであれば、私は救われません。若い頃から仏縁に恵まれて、よく聞かせて頂きましたが、道徳もまもれず、宗教心も無い私に、ただお念仏が生きていてくださる……。まことに何もかも駄目な私に……。

福本さんのお話にも、私の筆記も涙で杜絶えてしまい、一同お念仏の音が湧き、ありがたい法雨に浴しました。しかしすっかり日も落ちてきたので、これを会を閉じ、いつものように夕食となりました。

白井先生はじめ向島先生、その他、多数残られて、例の一道会流の精進料理の取り廻しで、なごやかな談笑裡に食事が進みました。

松本先生と学生の一行は、松山に向け今夜のお帰りとて時間きっかりまで居られて夕闇をついて帰路につかれた。

貝塚の金児黙存さんが、突如として夕食会の時に顔を見せられ「風出られなかったので、夜の座談会だけでも」とやって来られました。その姿に何か崇敬な、聖厭とでも形容される威力的なものを感じました。しかし箸を執り、談笑する間に、風間からの盛りあがった法炎の鎮まる和やかな法薫の内にとけこんでひとつになつてしまわれる。

河合嬢が、白井先生、向島先生に真摯に質問してられる、今日は突きつめた態度が見うけられ、頬にははじめて涙が見られる。河合さんはその後に来られての話に、お念仏のところに触れはじめられたようでありました。昨年、川畑愛義先生の御縁から一道会に来られ、この一年の間毎月幾度も来訪されましたが、先生を通じてお念仏の明りをうけられるようになったようで、今後の生涯は、池山先生とお念仏が護り育てて下さることでしょう。

八時をすぎたので、白井先生のお疲れが気にかかって、座談会は閉じることになりました。

今年の宿泊は、琴平のお二人と、香川県塩ノ江の葛西さ

んの三人であった。家内などと、又法味の時が過ぎました。三人は間もなく寢床に入られましたけれど、それからまだ暫く話声がしていました。

朝になっておききすると、葛西さんが勤めている農協の支部長であり、東京の本部長でもある方がお念仏者でありその奥さんが今晩泊られた琴平の方の一人であることが寝てからの物語りで判ったとのことで、御仏縁の不思議を喜び且つ驚きました。

翌朝は二河白道のお味いを語り合い「すべて水火の難に墮することを畏れざれ」の如来の仰せによってすっかりお念仏の坐りがついたお味いが出ました。

自力作善の心の息み難い愚悪の凡夫に「一心正念直来、オネガイダカラ、スゲキテオクレヨ」の如来御自らのお呼び声、ただ念仏して、たのもしき、先生のお写真、その上にかけられてあるこの色紙の額、その前にたたずまれ、やがて名号碑に頭を下げ合掌してお別れしました。

あとは来年もこの一道会にあいたいものと念じつつ寺に入りました。



病 間 日 録

北米、羅府市 大 野 静 哲

一九六九年二月十六日(日)朝、快晴。
当地(ロサンゼルス)としてはまことにめずらしいくらい大雨が次から次へと続くので病人の自分には気分的にもヘコタレそうであったが、今日は文字通りの快晴で、心持まで晴々している。丁度私の煩惱の暗い心があたかも明るい慈悲の光に遇うて急にあかるくさせられたという感じである。今日は日曜日である。毎月十六日には祖聖憶念の謝恩の聖日として煩惱具是の身ながら法界におもいを流すことをたのしみとしている自分である。

朝の勤行に、正信偈、浄土和讃、御文章、を心しずかに拝読した。それから恩師、足利浄円和上から、かつて(昭和二十九年十二月二日)拝受した慈語を、心あらたにして押し戴いて拝した。それは次のようなものである。

その一

南無阿弥陀仏、十九日上京して御書(私の書状)を拝しました。私(浄円和上御自身のこと)の脚の怪我は全快し

てはおりませぬが、生ノ島から入浴出来ました、御休心くださいませ。

其後、御病状如何がいつも案じて居りますが、ただ案じるのみでどうする力もありませぬ。私が案じて居るよりもお互に久遠劫来、如来様に案じられた身でございます。そうしたこと(如来の名告(なのり))がただナムアマミダブツの一法句の名告りとなってあなたの上にも、私の上にも顕現して下さってあります。

日本と米國、所は異って居りますが、お互に尽十方無碍光如来の御一心のうちに撰(おさ)められてあることをお互に喜びたいことに存じます。そして一切の心象(しんしよう)にあるがままにおはからいにまかせて、このたびこの御名に相遇したことを嬉しく存じます。

かねて御念願であった御著書も、今田さんから承れば、ほとんど完成している由にて同慶にたえませぬ。法界にこうしたものが出来ましたことは、如来さまが、増上縁とな

りたまうて出来たのでございます。いよいよ御自愛下さいませ。 敬具。 淨 円

その二

尽十方無碍光

○念仏はあかるきものに聞ゆなり、とわの闇路を照らしみちびく

○ためらわず行く筏(いかだ)かな、行くてには測(ふち)もあり瀬もありと知りつつ

○忍辱(にんにく)の果(はて)の御顔と拜むなり、ほほえみたすここの女仏

南 無 阿 弥 陀 仏

この身は、法器でございます、いよいよ御大事に願います。 淨 円

花田先生。御病中よりの慈光録の御編集に対しての御労苦に衷心より合掌を捧げて居ります。

実は、私事、昨年十一月二十八日(木)真夜中(十二時頃)はげしい呼吸困難におち入り、七転八倒の末、当市の警察の急救車で運ばれて、郡立病院に入れて頂き、応急手当を受けましたが、二、三日はほとんど無意識で危篤状態を続けました。不思議にも、所謂「九死に一生」を得しめられました。家内も「あなたは生き運が強い人ですね！」

と驚き、かつよろこびました。

そして十二月二十日(土)退院、帰宅いたしましたして、療養を続けておりますうち、正月四日の真夜中、再度の猛烈な呼吸困難におち入り、果てはその夜再入院させて頂き、その後の経過も良好で、一月十八日(土)に退院、目下自宅で静養しております。こうした次第で、御寄贈をいただいた、慈光録に対しても御礼状も差上げ得ないで失礼を重ねて居りました。ここに謹んで御厚礼申し上げます。

今朝、この原稿紙に拝写いたしました恩師足利和上の御書も、先生の慈光録御出版を恩師の慈語によって、法界の聖句として改めて頂戴して、先生へおそなえ申上げた次第でございます。何卒御賢察下さいませ。

御病後の御宝体、ご大事にお願ひ申上げます。

恐惶 謹言 大野 静 哲、九拜。

病中即吟 駄句あれこれ

病める身のころぼそきをなかなかにみ法(のり)を仰ぐ縁(えにし)とぞせん。

病める身にしみ入るものは妻や子のふかき情(なさけ)のしぐさにぞある

はからずもめぐみの御書はつきにけり病の苦しき忘れてぞ読む。(慈光録をうけて)

大字佐平治さまの追憶

園 憲 章

大字さんは先逝された信友、九州の有田武夫様、越後の

佐藤強三郎様、四国の長岡鶴吉様と共に、近角常観、常音の両先生のみ教をうけられた誠にありがたいお人でした。

本年一月一日、七十八歳を一期として大往生を遂げられました。

たとい大千世界にみたらん火をもすぎ行きて

仏の御名をきくひとはながく不退にかなうなり

大字さんの半生は、祖師聖人のこの御和讃を地で行かれた求道者でありました。

近角両先生の御在世中は、先生のおもむかれるところ、影の形にそうように常随昵近せられ、一言半句も聞きももらさず、一挙手、一投足にも教えをうけておられました。

近角先生が、信界建現のため、宗教法案反対、東本願寺句仏上人問題、等の時、大字さんは終始先生の傍に侍り、物心共に投入、日々東奔西走、席の温まるを知らずといっ

た燃ゆる火の玉となり獅子奮迅されました。

両先生の御縁によりまして、滋賀県神崎郡能登川町の弘誓寺住職那須野一乗(私の叔父)の法話をよく聴聞されておりました。

たまたま、私因縁深く、元旦の夕方、高槻の大字さんのお宅から御逝去の電話をうけ、二日の晩の夜伽、三日の告別式をたのまれました。突然の訃報に愕然といたしました。翌日、弘誓寺の現住職那須野超有さんと、彦根の舎弟、日夏義衡と走せ参りました。かねての御遺言もあり、お正月早々のこととて、向う三軒両隣と、京阪神在住のごく親しい方々とで、しめやかな夜伽を勤めました。

翌三日、自宅で告別式、やがて野辺の送りを行いました。かくてその日の午后七時頃は、方寸の白い小箱に白骨と化してお帰りになりました。

逐に逝く道とはかねて聞きしかど

昨日、今日とは、思わざりしを

藤原道長の歌がひしひしと身にしみました。

中陰中、三回ばかり参詣いたしました。満中陰の日、私は、遺族の方々に、大字さまと大先生のお出合いは何時の頃からでしたとおききすると、大正十年というところで、大正十年（じんもん）いたしますところ、大字さまのお若い頃は、相当な荒武者であったとそうです。

二十一歳の時、徴兵検査をうけ見事に甲種合格で入隊されました。二等兵から一等兵、やがて上等兵への昇進の選抜検閲がありました。大字さまは有力上等兵候補として自他共に許す決定的なものであった由ですが、予想に反し幸か不幸か不合格、意外の人が選ばれました。これには本人は勿論のこと、同期生一同も啞然としたことでした。大字さんの心中は忿懣（ふんまん）やるかたなかつたことと想像いたします。

一夜は暗涙にむせび七転八倒の苦痛をされ、何の因果でこの俺を誰が？と考えられた時、頭の中には、検閲の時、あの傲慢な髭面（ひげづら）の〇〇中隊長の顔が浮び、大字さんの心は疑心暗鬼の虜となり「ようし、何の恨みでこの俺を、我慢ならぬ消して仕舞え」と決心されました。然し当時の軍国華やかな時代の軍法会議のきびしさは覚悟の

上で〃死刑が何だ、明日こそ！〃と、この怨みを晴らしてやろうと悪鬼のとりこになりました。

ところが、その翌朝、故郷のお父さんからの一通の手紙がとどけられました。不思議なことです。す早く開封されると、一枚の紙に〃南無阿弥陀仏〃とただ六字の尊号のみ。両手に持ってじつと見つめていられたが、手紙はいつとはなく膝におち、溢れる涙を両手でおさえ、茫然自失されたことでしょう。柔よく剛を制すとか、御尊父をとおしての大願業力の六字の尊号の前には、夜びいての悪夢は雲散霧消して、恨み骨髓に徹した〇〇大尉のことも、恩讐の彼方へ消え去って行ったのです。法然聖人の御弟子の歌とか

打つものも打たれるものも、もろとも

南無阿弥陀仏と、唱えこそすれ

利剣即ち是れ弥陀名号の妙味を体験せられたのです。禅家の、両頭を截断して、一剣天に依って寒し、などのお言葉も仰がれます。

それから星移り月変つて幾春秋、大字さんは数十回も店を移されたとか聞きました。おそらく後年発明された、大字式背推調整器を完成し普及するためであったと思われませんが、とにかく、転々と移り住まれたことも、徹底的にもの考えおやりになる性格にもとづくものかと考えます。

大正十年東京に出られて本郷の求道会館の門を叩き「こ

こは近角常観さんの宅かな！」と大声によはわり、訪ねられた時、会館の奥からニコニコと童顔をほころばせて、お出ましになった大先生の慈眼温容に接せられると、大字さんの煩惱の六賊、癡猛（ねいもう）な闘争心も直ちに消滅して、後悔の涙ばかりであった。これというのも、大先生とのお出合いはご因縁が熟し切っておったことと思えます。これをお聞きした時、丁度袒師聖人と弁念との板敷山での出合いのことも連想させられました。御和讃の

罪障功德の体となる 水と水のごとくにて

水おおきに水おおし 障りおおきに徳おおし

も、そのままに知られました。

爾来大字さんの怒眼は慈眼に、強剛心は柔軟心に自然に転ぜられ、私の接しはじめた日から、何時でも何処でも、また誰にでも終生一貫して、温かにまじめな人柄で、接する人をして同化する或零囲気をかもし出すものがありました。近角常先生も「親切院丁寧居士だな」と大字さんを評して居られました。祭壇にまつられたニコヤカナ御写真に向って、もっともっと生きていてほしかったのにと、思わずひとりごとを申し上げました、それは集った人々の皆の声であったとも思いました。

話は変わりますが、大字さんは大変お酒の好きな方で、若い時は、あの堂々たる体軀で、斗酒なお辞せずといった

酒豪家であつたろうと思います。しかし世間一般に云う酒

豪と申すよりも、宿業を持って生れてこられた人で、酒豪と申すよりも、宿業により酒業を持って生れてこられた人と云うべきでしょう。さすが晩年には大酒されても決して身を崩さず乱酔して人に迷惑の及ぶようなことを見ませんでした。むしろ始終ニコヤカナ微笑を浮べ酒杯を持って居られた面影が今も眼前に髣髴といたします。

いよいよ臨末の前二十日間程は一寸お酒をやめておられました。すうすがあまりに淋しそうで、お家族の方々が、ビールをすすめられたら最後までたしなまれた由です。

満中陰におまいりしますと、本山から頂かれた、法名の道心院積勝晃の位牌はお仏壇の中に、今一つは御靈別に、近角真観先生から送られた、大心院釈治平俠士の位牌がまつられてありました。皆様のお話では、近角両先生を大知識として、仏心の開眼されたのだから、大心院釈治平俠士とされてはということになりました。すうすが、ごもつとものことです。

昭和の妙好人、大字様の追憶を心に浮ぶまま筆をとりました、いたらぬ点は呉々も御海容下さい。

昭和四十四年二月末日

大字さんから聞く法味二つ

聚 墨 生

近角常観先生が亡くなられてその追悼会が、関西在住の信徒の人々によって催されました。その後隔月に大阪で常音先生の法話会がはじまりましたので、先生に懇願して、名古屋へもお立寄り願って法雨に浴させて頂きました。その最初から先生のお伴して下さったのが大字さんでありました。

そういうことで私には近角先生を離しては大字さんを憶うことは出来ません、文字通り先生が西下された時は、影の形にそうように常随せられました。何時も私共の先頭に立って大切に聴聞していられたのですが、幸に私は二つの法味を大字さんから聞きましておりますので、お亡くなりになった今日、お懐かしさ一杯からそれを誌します。

一、
大字さんは「大字式脊柱調整器」の発明と普及に生涯をかけられました。私も一揃い頂いて愛用させて頂いておりますがこれについて、次のように語られました。

「私は脊柱の不整のために永年苦しんで居るうちに、調

かね。大抵そんなことだろう。だから自分の心はチツとも解っていない。本堂であのように老人方を前に話したのも、本当のことであれば、どんな人でもうなずいてくれるものだ。田舎の老人がうなずいてくれてこそ有識者もうなずくものだ。だから中央部の主要人物に説くのも本堂で老人相手に話すのも同じだと思っている」

とのことであった。そして次に
「君も調整器を製造販売しているが、それが本堂によいと信するのであれば、資本や人の力を借りずに、街頭に立って、一人一人に納得出来るように説きたまえ」と、明確にお教え下さいました。それから大阪の盛り場で街頭に立って道行く人々に調整器の効能を説き続けて、世にひろめて来ました。私にとっては、これが先生から頂いたお念仏であります」

とのことでありました。このことは私の信の旅においていつも思い浮べられ、大きな指針とさせて頂いています。

二、

次に、常音先生が亡くなられて後の話であります。大字さんは、先生が亡くなられたときかされると、悲しむよりも自分をあとに残して往かれた先生を恨む心さえあった由です。そうした心でおられた或日、夢を見られました。

それは、常音先生が庭に面した縁側で倒れて居られるの

調整器を発明し、人様に勧めておりました。ところが或方が、近角先生のお許しがあれば資本を出すからもっと大々的に製造販売をしてはどうか、と云って下さいましたので、先生にそのことを度々お相談申しましたけれど、よいともわるいとも一向に仰言らない。そこでひそかに思いましたには、先生は信仰上のことはすべてよくご存じであるが、実業界のことはお確信を持たれないのだろうと、傲慢にも心できめておりました。

そうした或年、御自坊の西源寺での報恩講にお参りしました。先生は門徒の方々に、宗教法案の不当であることを汗を流して説いていられました。御法話がすんで、お座敷へお伺いすると、先生は私を呼ばれまして、

「大字君、君は今の話をどう聞いたかね」

「宗教法案反対のお話ですか」

「そうだよ。君の考えでは、こんな田舎の寺で、老人の多い集りで、汗を流してこんな話をする時間があつたら、国会議員や有識者の集りで話した方が効果的だと思わぬ

で、先生をお抱えして座敷にもとられると、先生はパツパツと眼を開かれて、

「大字君、可哀相ということと、寿命とは相応しないね。まあいい、二十二の願があるから……」

と告げられた。びっくりしたトタンに夢がさめ、サテ二十二の願とはどういうことであろうかと不審に思っていたら、ところが信友の家を訪ねると信仰の本があったので、それを読んで二十二の願は、浄土に生まれたものが再び人生に還って思う存分に縁ある人々をたすけとげるようにしたいとの阿弥陀仏の御誓であることが知らされ、再び驚かされたのは、この苦しみの多い自分を哀れまれて、夢にまで現れて下さることが、二十二の願のはたらきである、このことを先生はお知らせ下さったのだと気づかれ、それから、先生が先きに往かれたことを不足に思う心は消えて、還相のお姿をもってお護り下さることのありがたさをいよいよしらせられたとのであります。

大字さんはこのことを、今は亡くなられた新潟の佐藤強三郎さんに打ち明けられると、大いにうなずいて

「ありがたい夢だね、その夢が還相だよ、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……」と、お二人は涙と念仏にしばし言葉も出なかつたとお聞きしております。

歎異鈔第六章

花田正夫

①専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子という相論(そうろん)のそうろうらんこと、もてのほかの子細なり。

②親鸞は弟子一人もたずそうろう。その故は、わがはからいにて、ひとに念仏まうさせそうらははこそ、弟子にてもそうらわめ、ひとえに弥陀の御もおしにあずかりて念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこときわめたる荒涼(こうりょう)のことなり。

③つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば往生すべからざるものなりなどということ、不可説なり。如来よりたまわりたる信心をわがものがおにとりかえさんともうすにや、かえすがえすもあるべからざることなり。

④自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また

それに気づかずにいる、そのかくれたものを会話術の中に掘りおこすことが所謂彼の「産婆術」であった。彼は生涯、師とあがめられることをきらい、共に真実なるものを求め合う友として弟子とまじわっている。

私はこのソクラテスの態度が聖人のそれに非常に近いものであると思う、いつもこの章を読むと心に浮ぶ。

弟子一人もたず候

何というスッキリとした表白であらうか。これは単なる謙遜ではない、聖人の信眼にはそれが当然すぎる事実であるから、そう仰せられたまでである。

この聖人の心にふれはじめたのは、池山先生に接してからであった。私の六高時代、池山先生からドイツ語を学び歎異鈔をきいたのであるが、その頃先生に接する者みなが、非常に先生を慕っていた。或日「先生のような人格者には今までお会いしたことがありません」と何かのはずみに申すと、苦笑されながら「人格者と呼ばれるうち二種類ある、一つは無為無能者のかえ名であるが、そういう意味の人格者としての資格は十分あるが今一つの真の人格者などとはもつてのほかである。他人が何と云おうと、自分はわかりきった悪さえもやめられぬ人間だよ。ただ他人とちがっていることと云えば、このような者が聖人に導かれて念仏申していることだけなんだ」と答えられた。

師の恩をもしるべきなりと、云々。

本章によって師弟道の全き姿を知らされる。生涯をかけて教育学をきわめられた福島先生は「教育の至極の姿は、師弟間の仏仏相念(仏と仏と相い念じあう)である」といわれる。師は弟子の内に尊いものを見出し、弟子は師の尊い理解を謝すという姿で教育が成就されるのであろう。

それなのに、弟子を私有物かのように扱うことは、ことに縁あって共に仏道を歩む者の間においてあろうなどとはもつてのほかのことであるときびしく聖人が誡められる。

ソクラテスはアテネの青年に大きな影響を与えたのであるが、自分の道を「産婆術」と云っている、これは母が産婆を業としていたところから、それを借りたのである。産婆は唯妊婦の中に宿る尊い生命の誕生を助けるだけで、何も与えるのでない、そのように各人が尊い智慧を持ちながら

その時、私は異様の感動にうたれた。それは皎々と輝く名月を仰いでしきりに讃歎していると、月に若し口があれば「私は黒い塊りで光の影さえもない。唯太陽の光照を身にうけているだけだ、その照り返しが君の眼を驚かしているのだよ」と告げるであらう。

悪性さらにやめがたし ころろは蛇蝎の如くなり

修善も雑毒なる故に 虚仮の行とぞなづけたる

無慚無愧のこの身にて まことの心はなけれども

弥陀の廻向の御名なれば 功德は十方にみちたまう
の聖人の悲歎述懐をわが身にかけて味わわれた先生の姿であった。これがこの章への開眼をうけたはじまりであった。

ひとえに弥陀の御催し

教行信証の信巻に

「夫れおもんみれば、信樂(しんぎよ)を獲得すること
は如来選択の願心より發起す、真心を開闡(かいせん)
することは大聖矜哀の善功より顕彰せり」とも、

「しかるに常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず、真実の信樂実(まこと)に獲ること難し、何をもつての故に、いまし如来の加威力(かびりき)によるが故に、広く大悲広慧の力によるが故なり」、又総序の文に「たまたま行信を得ば遠く宿縁を慶べ」と述懐せられる聖人は、一切の念仏申す人の上に、遠く深い弥陀仏の願

力の御催しを感じせられて、御同行、御同朋とかしずかれ
ている。このことは聖人の言動のいたるところに裏に表に
散見している。このような態度に出られるのも、聖人自身
が「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなる
ことあるべからざる」身と信知せられ、また「いかにい
とおしふびんと思うとも存知の如くたすけとぐること極め
てありがたし」と人間の慈悲の無力さを知り尽くされて、
われひと共にたすけられるのは弥陀仏の本願のまことひと
つとの仰信からおのずとそうなられたのである。

観無量寿經の小品中生者のところに

「かくの如きの愚人、僧祇の物をぬすみ、現前の僧物を
ぬすみ、不淨説法して慚愧あることなく、諸の悪業をも
つて自ら莊嚴せん。かくの如きの罪人、悪業をもつての
故にまさに地獄に墮すべし、云々」

とある。これによって、仏物をわがもの顔にぬすんで自分
のかざりとする者の罪を知らされるが、物でなしに、人、念
仏申す人をわが弟子と申すことの重罪のほども知らされ
る。歎異鈔に二ヶ所聖人のきびしいお叱りがあるが、ここ
もその一つである。「もてのほかの子細なり」とも「きわ
めたる荒涼のことなり」と繰り返かえされてのお言葉をうけ
て、強く省みさせられることは、私自身にそうした心の常
にうごめいていること、御誠めの前に唯慚愧の外ない身、

のも、私共が常に愛憎、痴慢の煩惱の雲に覆われて、真実
を見る眼を失っているせいである。愛する者同志は何時ま
でも睦び合えると思ひこみ、それが崩れると泣きわめき、
或ははなるべき縁も来ないのに憎み合う者と離れようとし
て思うようにならぬと愚痴に明け暮れる。こうした時、聖
人のこの言葉が常にあたらしく聞えて来る。

經典に「仏を見るものは因縁を見る、因縁を見るものは
仏を見る」とある、これは正しい因縁は仏の智慧によつて
のみあきらかにされ、煩惱に閉ざされた者には知ることが
出来ないことを教えられる。唯愚鈍の身も阿弥陀仏の無碍
の光明に照護せられるところに、この言葉を信知せしめら
れ、道理として智的に知るといふのでなく、身体でうなず
かされる道がひらける。

ともあれ、この聖人の仰せは、愛憎痴慢に苦悶する身に
もいなむことの出来ぬ真実として、うけとられ、そこに一
縷の光明がさす。

自然のことわり

第四節に慈光に照護せられる子弟の莊嚴さを教えられる

「自然のことわりにあいかなわば、仏恩を知りまた師の
恩をも知るべきなり」

と。自然のことわりにかなうとは、仏の御誓いのまことが
徹到すれば、自然に仏の御恩が知れ、またそれまでに導き

口に仏を讃えながら、仏を利用し、自らを莊嚴する道具に
供している心根が知らされる。

離合は因縁による

「つくべき縁あればつき、離るべき縁あればはなる」と
は当然のことである。一切の事象は原因があつて結果を生
じるので因縁外のこととはあり得ぬ筈である。それなのに私
共の實際生活では、愛憎、好悪の感情、是非、善悪の利己
的な理智に支配せられて、それを中心に自分に都合がよい
様な判断ばかりしているために、正しい因縁を見失うの
で、この当然すぎる事実が驚かされるのである。

さて聖人にして見れば、幼い時父母と別れ、恩師にめぐ
り合つての喜びの日も五年足らずで、念仏の法難の嵐のた
めに北陸の流通生活、関東二十年の睦びも六十過ぎて別
離、京都への隠棲、しかも老境に入られての親子、御夫婦
別居の生活、その間御子善鸞大徳の異義の問題もあつた。
この幾山河を越えて来られた聖人にしてみれば、どんなに
か睦び合い慕いあう仲間とも幾度か別離し、心になわ
ぬ人々とも縁がつきないかぎり別れ去ることの出来ないとい
う悲哀を幾度か経験されたことであろう。そうした歲月
を念仏裡に送り迎えられた挙句に、極く自然な声として
「つくべき縁あればつき云々」と語られたことであろう。
このわかりきつた事実が、何時もあたらしく知らされる

をうけた師の恩も知らされてくる、とのことである。

私は二十四歳の秋、仏の御真実ひとつに気づかせて頂い
て、最初に心に浮んだのは亡き父であつた、墓前にひざま
ずいて、人間に生んで下さつたことの御礼、それは身の幸
不幸でなく、財産の有無でなく、人間に生れた素裸のなり
の御礼が云えた。源信僧都の横川法語の「それ人間に生れ
たること大きなよろこびなり」がそのままにうなずける
嬉しさである。

ギリシャの神話に、人間が神に向つて「人間にとって一
番よいことを教えて下さい」とおたずねすると、「そんな
ことは聞かぬがよい」とこぼされた。人間が重ねてしつこ
くおたずねすると、神は荒々しく「早く死ぬることだ、も
つとよいことは生れて来ぬことだ」と答えられたとある。
山の彼方に幸福の国があるかに夢みている間はよいが、そ
のこのすべて空しいと知らされねばならぬ。ピンズル尊
者が或る王に説いたという「古井戸の喩」は、その人生の
空しさを徹底的に説いている。それに、

「東の空に美しい太陽のほるのを見て、東方に理想の
国があると信じて或る青年が旅に出た。行けども行けど
も太陽には一向に近づけない、旅に疲れた青年がフト後
ろを振り向くと巨象が砂煙をあげて追いかけて来る。青
年は東へ向つて走つたけれど巨象の足は速い、そこで

四辺を探すと一つの古井戸があつて木の根が下つてい
た。急いでそれをたよつて井戸の中に身を隠して、ホッ
ト一息して下を見ると、そこに死の竜が口を開けて待っ
ている、身辺に四匹の毒蛇が今にもとびかかろうとして
いる。この青年の耳にゴリゴリという音がきこえる。そこ
を見ると白黒の鼠が木の根を昼夜を分けずかじつてい
る。上には巨象が待っていて、たすかるすべは無い。
絶望して空を仰いでいる旅人の口に、一日に五滴の甘い
蜜がおちてくる、その甘さに身の危険を忘れている」
である。巨象とは不幸な災難である。竜とは死、四匹の毒
蛇とは色々の病氣、木の根とはいのち、白黒の鼠とは日夜
いのちのきざまれる姿、蜂蜜とは五欲でというのある。こ
の説話を読んでトルストイは身震いして驚いたと伝えら
れる。ツルゲネフの詩にもこれによつたと思えるものが
ある。

さてこうした人生にあつて、救いの道は唯一つ、仏に遭
うこと、仏のおまことを聞きひらかして頂くことばかりで
ある。そこに、仏力の自然として空々漠々とした世界人生
が、生き生きとした、尊いものと転じてくる。はかない人
生ながら、そこに不滅の光明を仰ぐ身のしあわせを、父
母、師友、そして生かされておる国と世界に手をあわさず
にはいられなくなるのである。

猿 王 の 物 語

ジャータカ物語

それはお釈迦様が古い過去の世にヒマラヤの山奥の猿の
王としてお生れになった時のことであります。

或る時、この猿は一人の獵師に捕えられ、ハラナという
園の王様に献上されました。そして長く王宮に住まう間に
よく王様につかえておこたらず、人間の世で行われてい
る様々の習慣もすっかりおぼえてしまいました。王様は彼
の誠実な奉仕を歎かれて、非常に可愛がられました。もし
て前に彼を捕えた獵師を呼び出し「この猿を捕えたものと
場所に来て行って放してやれ」とお命じになりました。

この様にして彼が久し振りに故郷の山奥へ帰つて来ると
それを知った猿の群は、喜びの叫びをあげながら、大きな
岩の上を集つてきて、口々に歓迎の言葉をのべてから

「一体あなたはこんなに長い間どこに居られたんですか」
「ハラナの王宮に居たのだ」

「そしてどうして放して貰つたのですか」

「王様は私がよく奉仕したので、それを嘉よまされたんだよ」
などと色々語り合ううちに、猿共は彼に、

「それではあなたは、人間の世で行われている習慣をお

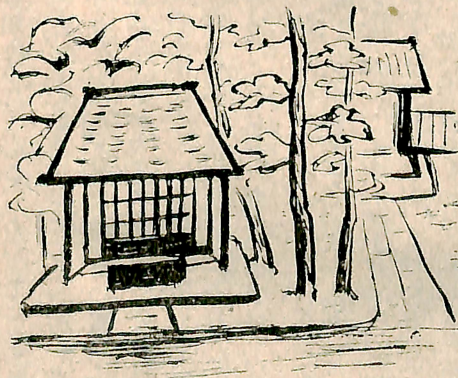
それ以後も矢張り不平も腹立もおこり、愛憎の雲霧は常
に心を覆うけれども、また仏心にひきまどされては、本来
の整然とした上下、左右の秩序ある世界に帰らされる。

近角先生の晩年の愛唱歌

跡戻り 跡戻りして迎らん

甲斐なきことに ころろ迷いて

も、こうした消息であるう。もうこれで立派になつて、や
りそこなわないう者となれるのではなく、やりそこないのや
まないものに、お果れない御方のましますことのためのも
しさが知らされる。



ほえて来られたのでしよう。私共にも話して聞かせて下
さいませんか。私共はそれを色々知りたんです」
と云い出しました。彼は人間の世界のならわしを尋ねては
いけないと堅く止めましたが、猿共があまりにせがみます
ので次のように語り出しました。

「人間という者は、身分の高い者も低い者も、富める者も
貧しい者も、誰も彼も自分のものだ／＼と云つて執
着し、有つても無くなるという無常の道理を知らない。
さあ、彼等のおろかな暮しを耳にいれておおき」
と云つて、次の偈(うた)を唱えました。

こはわが黄金(こがね) こはわが宝と、

これぞ、人の明け暮れの言葉なり

かたくなにおろかな人々には、

聖なるみのりは見られず……

これを聞いた猿共は、

「もう云わないで下さい、もう沢山です。」

聞くにふさわしからぬことを聞いてしまいました」
と云つて、両手で耳を強くおおうて

「この場所でも我々は浅間しいことを聞いてしまった」
とその場所をもそして、他の所へ去つて行きました。又

その平たい岩にはガライタ(誹謗)平岩という名さえつい
てしまったというのであります。

おわり



あ と が き

花もわらいて鳥うたう
今日の御祭りみないわえ

○ 福島先生から「人生と信仰」の原稿をいただき、御本書を中心に八十路を迎えられたの御信味をこれから回を重ねて下さることに、ありがとうございます。

四月は花祭の月であります。誕生仏を中心に童男童女にとりまかれて、花御堂が飾られ、声の限り仏徳をたたえる行事は、紛争に明け暮れる現時下の日本に、心のやわらぎと、ほほえましさをただよわせますことでしょう。

花祭の歌

一、大和島根にさき出でし

花のさまさまつみそえて

今しよそえる花御堂（はなみどう）

立たす仏の尊とさよ

二、あわれみちとせそのかみに

天（あめ）と地（つち）を指さして

なべてこの世をすくうべき

ひじりとこそは生（あ）れましぬ

三、ときは春なり地は王土（おうど）

ここにみおしえいやさかえ

御案内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半、

一道会例会。

市電、新郊通り二丁目下車、東入る。

毎月二十四日、午前午後、

市内昭和区小椋町、教西寺法話会。

市電御器所通り下車、桜花学園の東。

おことわり

五月と六月の第二日曜の一道会は津市に行きますので休みます。

定価 半年 二百五十円（送共）
一年 五百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七